

1. エピソードとわたくし  
三才のころ

春の日はざしの中庭下にいると気持よい

座敷をのびると私がかや布国本ひろくある

布国の飾子で目かきしてりる みたたかそう

た 手にふれるとやわらかい 身たたかき

ふんわりつたきつて 柔か よく見るとフサキ

かした茶とどろろの柄だ そろどろとググ

をきりぬころ ほさきを握って 走って一つきり

わいた うすくいつた もう一つ もう一つ

と布国のどろろと全部きりとりた 手

いらい、ばいね 母に見せたくてその両手の

どろろをいとお母さん こんどどろろと見せ

た 母はたずりていた

ふ、一年生は存、た

学校は海辺の砂場と山り木々との何となく

一年生は小さい 運動場に出るとはなす、た

た あり日つとエの方をみると上級生木の

かへあいていた 山の系へ行けるのた 行く

てみよろ 山の系へ行くのは簡単だ、た

木々のまわり縁のゆにめずらし草がたふさん  
 あり、じやぶ玉もあまる 夢甲に草花をつんた  
 此れからも来する プレパルの音かきこえ  
 空の休み時肉が終ったのかもと丸がいが  
 帰り道水がわがう厚い 右へ手あつたり左へ下  
 たりしてこわるとかえり道がわかつた  
 教壇へついた かがろと教壇のドアをアキ  
 算をこつたあゝ一審前の席についた  
 笑むがこちろを引こつとほろえんぞくれ  
 長

三、 やほり一年生

肝同京るちやんとさくあそんだ  
 ゴムをゆを不にこぼり ちろ一分を京るちや  
 んの弟にもつてもうあ、た、「一鉄銅製<sup>信算</sup>何知<sup>何知</sup>あた  
 ち十からとすれ 意味<sup>意味</sup>不解なうたうしきもの  
 とおがさみ二人でわしづっ言くした<sup>お</sup>とあ  
 をとんだ 京るちやんが突然Mのお兄ちゃん  
 上のサイレレレの所子で行った<sup>お</sup> いや野こ  
 うと二人でジグザグの階段をのぼった 下を  
 見ると人が水さく見える おひるのサイレレ

をなうす所は鉄条もでオニ可れていてそのを  
 るたいで甲に入りのだがまだいだらべに子イ  
 かじかかつてどうにも存う存い  
 京ろちやんが「お母さんをよんでらると走って  
 行つた まもなく京ろちやんのお母さんか  
 にはりばさおをむろて「んんんんいい存がり  
 のぼつて来た べに子イをきってくわした  
 夕方ま月名に入つた時「の心と子イどうい  
 のと母が言つた だろ」ていした

4. 二年生

宮崎子アチヤムと仰よく存うた  
 毎日鉄道の敷地へ「ころつめ草」とりか行つた  
 鉄道は引込か線では「氷の牙さい川だ」その  
 上の鉄橋を「たつてしろつめ草」い「げいのろ  
 場へ行つた ビンク白の花は春の天國たつ  
 た 二人でかすかざりやなるとわの存わ存い  
 川へ「つらつてええ子でぶごした 葉しぬ  
 た 表の甲で「おころんで自分がお甲の「大残念  
 たりた ころつて「けいぶ存んか「う行つてけりけ  
 存いと母は「いわけい知

証<sup>いひ</sup>救<sup>いひ</sup>もちかそつてけしおろれた

五十せこのものさしでうでをひしかりをし

やりとたたわれ喜ぶにた <sup>ま</sup>のさしは

おれのと悪い業であして又たわれた

そして次の日 ~~ぬ~~ ちかあやいと花つふれわつた

今もその ~~世~~ 長孫だ

三 <sup>つ</sup>ころの <sup>ま</sup>ま <sup>い</sup>百 <sup>と</sup>といろ

あ <sup>と</sup> <sup>十</sup> <sup>四</sup> <sup>年</sup> <sup>の</sup> <sup>子</sup> <sup>を</sup> <sup>だ</sup>